

Program Note

コープランド / 『アパラチアの春』

アーロン・コーパーは1900年に生まれ1990年に亡くなったアメリカを代表する作曲家です。彼はインディアンや黒人、アメリカ大陸開拓時代の風土に育った白人の音楽を手本にアメリカの個性を強く表現した作品をたくさん作りました。「アパラチアの春」は第2次世界大戦のまっただなかの1944年に作曲されたバレエ音楽です。

この曲は、アパラチアの山地に19世紀初頭にできた開拓村の風俗を題材にしています。アパラチアの春、新築の農家で開拓者の結婚式が行われています。曲の冒頭ではこの結婚式に集まった人物たちを1人ずつ紹介していきます。集まった人達は皆活気にあふれています（テンポが急に早くなる部分でそれを表現しています）。新郎と新婦が仲むつまじい踊りを披露します（これはクラリネットがゆったりした音楽で表現します）。次に信仰覚醒家とその信徒たちによる愉快なスクエア・ダンスへと続きます。花嫁のソロ・ダンスもあります。そしてシェーカー教徒の讃美歌が歌われ、あたかもシェーカーを振るような踊りがあったり、とんだり、はねたり、叫んだりして、やがて音楽はモダラートのコーダに入り、人々は家をひきあげ、あとには新夫婦が静かにとり残され、希望にみちた将来を念じながら祈りをささげ、曲は静かに終ります。

この曲はもともと小さな編成用に書かれたものですが、作品の完成した翌年に編曲された大編成のオーケストラ版の方が今では有名になっています。今日はオリジナルである13楽器による編成で演奏します。

(m.o.)

ホルスト / 『セント・ポール』組曲



どもホルストです。えっ？ロシアのプーチン大統領代行に似てるって？なにわけのわからんこと言ってんですか。作曲家ですよ作曲家！まあそうは言っても本業は教師ですから「日曜作曲家」みたいなもんすけどね。でも組曲『惑星』や『吹奏楽のための第1・第2組曲』は知ってるでしょ。あれみんなボクの曲。いい曲でしょう、ねえ。えっ？他の曲は知らないって？マジ！そりゃイカンですね。しょーがない、じゃあとっとおきの自信作を紹介しましょう。

実は私は～っと「セント・ポール女学院」で勤めていたんですよ☆。ここの弦楽合奏団のために書いた曲がありましてね、題名もズバリ「セント・ポール組曲」。えっ？そのまんまじゃないかって？いいんですよ分かりやすい方があ。まず第1楽章「ジーク」。これはイギリスで16世紀に流行した活発な舞曲ではつらつとした気分になりますよ。第2楽章「オステイナート」はかわいい旋律が繰り返される曲。ちょっと癒し系かも。一転して第3楽章「インテルメツオ」は哀愁に満ちたアーデージョとそれを忘れようとするかのように騒ぎたてる激しい旋律が印象的。そして第4楽章「フィナーレ」は「バンドのための第2組曲」の終曲をアレンジしたもので、ルネサンス期にやはりイギリスで流行したフォークダンス「ダーガソン」や「グリーンスリーブス」も登場する楽しい曲です。まあとにかく聴いてみて下さい。えっ？アタマの感じが西村雅彦みたいだって？だからわたしやあホルストだってば!! (ただくま たけし)

Program Note

プロコフィエフ: 大滝雄久編 / 『もうひとりのピーターと狼』

「ピーターと狼」の物語はもともとロシアの古い民話でした。乱暴な森の狼を勇敢なピーター少年が捕まえてしまうというお話です。

1936年、ロシアの作曲家プロコフィエフは‘子供のための語り入りオーケストラ音楽’を依頼されると、すぐにこの物語をとりあげ交響的物語「ピーターと狼」を作曲しました。プロコフィエフは物語のすべての登場人物(動物)たちにそれぞれ決まったテーマを使い、物語の進行にそつて入れ替わり立ち替わり登場するようにしました。作曲と共に台本も自分自身で作ったため、音楽と語りとがぴったりと絡み合い、聴き手は物語を追っているうちにピーター達が活躍するオーケストラの世界にも自然に引き込まれてしまいます。日ごろはクラシック音楽に馴染みの無い人们にも分かりやすく、子供から大人まで誰もが楽しめる所から、交響的物語「ピーターと狼」はあつという間に世界中で愛好される1曲となりました。

本日演奏する「もうひとりのピーターと狼」は、プロコフィエフが作曲したこのオーケストラの為の曲を、ファゴット奏者 大滝雄久氏が木管五重奏とピアノの為に編曲したものです。「ピーター」であって「ピーター」でない（？）主人公が、狼退治の活躍をみせてくれます。もちろんその勇敢ぶりは、オーケストラの時と少しも変わりありません。

物語の内容？ …それは、演奏が始まつてのお楽しみ。ナレーションも、ピアチーレ室内合奏団用の特別ヴァージョンとなっています。

(ピーターの祖父)

サン=サーンス / 組曲『動物の謝肉祭』(副題:『動物園の大幻想曲』)

誰もが知っている曲だからお堅い説明はなしってことで、動物達(含む演奏者)と共にお祭気分を together しようぜ！

- 1 :『序奏と獅子王の行進』 序奏の後に獅子王の登場。百獣の王ライオンの、そのまた王様だぞ。頭が高い、ガオー。2 :『めんどりとおんどり』 鳴きながら歩き回り、最後は走り出す。
- 3 :『らば』 飛び跳ねてます。4 :『かめ』 もしもし亀よ～の歌詞をフランス語でつけてみよう。
- 5 :『ぞう』 象のダンスってきっとこんな感じ？しかしバス弾きにとってはいい迷惑だ。6 :『カンガルー』飛び跳ねる。ちょっと止まって考え方。7 :『水族館』 水槽の中を魚がゆっくり泳ぐ。
- 8 :『耳の長い登場人物』 私がもったいぶっている訳ではないのです。原題がこうなんです。要するに「ろば」。9 :『森の奥に住むかっこう』 2台のピアノをよく聞いて下さい。森の静けさがわかるでしょう？ 10 :『鳥』 何羽いるか、数えてみてね。11 :『ピアニスト』 えせピアノ教師や形式主義の評論家なんて、動物園に放り込んでやれ、ということらしい。12 :『化石』 なんで化石がいるの、などと言う子は悪い子です。メインテーマは自分の曲(『死の舞踏』より、がいこつの踊りのテーマ)。13 :『白鳥』 解説不要。しかしこれを弾けるあなたは幸せ者ですよ、梅ちゃん。14 :『終曲』 全ての奏者に出番があるのはこの曲だけ。登場人物、いや動物が勢揃いしての馬鹿騒ぎ！やっぱりお祭はこうでなくっちゃ。

(ちやちやきい)